

平成 22 年 6 月 10 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006～2009

課題番号：18401030

研究課題名（和文）インナーモスト・アジアにおける陶器貿易の構造

研究課題名（英文）The Study on Trading Structure of Ceramics in Innermost Asia

研究代表者 亀井 明德 (KAMEI AKINORI)

専修大学・文学部・教授

研究者番号：70204633

研究成果の概要（和文）：中央アジア地域と旧南宋領域との陶器の移動の実態を究明することを目的とした。調査地をモンゴルの首都であったカラコルム遺跡とし、かつてロシア科学アカデミーが発掘した陶器を再調査し、全資料の実測図の作成、写真撮影を行い、英文サマリーを添付した報告書として公刊することによって、研究資料として活用できる成果をあげた。さらに元時代の景德鎮窯産の青花瓷を東南アジアの遺跡出土品にも調査を広げた。

研究成果の概要（英文）：We have studied for the purpose of clarify the actual situation of the trade ceramics with the area in Central Asia and in the former Southern Song dynasty. We set the investigation ground the Kharkhorum site which was a capital of Mongolia, and we reexamined ceramics which Russia Science Academy team excavated once and took pictures and the making of the drawings of the fragments, and published the two reports which attached English summary. Furthermore, we investigated Yuan blue and white porcelains discovered in Southeast Asia.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	2,800,000	0	2,800,000
2007年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2008年度	3,200,000	960,000	4,160,000
2009年度	3,100,000	930,000	4,030,000
年度			
総計	13,100,000	3,090,000	16,190,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：モンゴル、カラコルム、陶器、元代、青花瓷、考古学、景德鎮窯、トローラン

1. 研究開始当初の背景

インナーモスト・アジアにおける文明交流史に関して、陶器を資料として、陶器研究の専門研究者による実証的な研究はほとんど皆無に近い状況であった。その原因は、この地域で大規模な発掘調査を行うことの困難性

にあった。1948年から49年にロシア科学アカデミー（団長・キセリヨフ教授）による発掘調査はほとんど唯一のものであるが、すでに半世紀前の研究水準に依拠しており、その後の中国陶器研究の成果がいかされていない。

2. 研究の目的

研究の目的は、主として次の2点に絞った。

(1) インナーモスト・アジアの14-15世紀において、旧南宋領域との間にどのような形で物資の移動が行われたのか、その資料として陶磁器を調査し、実証的に理解することである。

(2) モンゴル帝国が版図とした地域および侵略を試みた地域、すなわち、北東アジア、日本・琉球・東南アジア地域で発見されている中国陶磁器の実態を正確に、かつ細かく把握し、資料を研究者に利用できる形にまとめて公開することである。

3. 研究の方法

インナーモスト・アジア地域および上記の元帝国が関係している周辺地域における、既往の発掘調査によって発見されている中国陶磁器について、それが保管されている現地の研究施設において、実測図の作成、写真撮影を行った。資料の抽出に当たっては、従来しばしば見られる出来の良い陶磁器を選択、限定することではなく、可能な限り悉皆的に調書を作成し、それを英文サマリーを添付して、印刷物の形で広く公開することに努めた。

4. 研究成果

上記の2つの目的を実施するために、4年間に以下のような成果をあげた。

(1) 研究の主な成果

モンゴル帝国の最初の都であるカラコルムは、1235年にオゴデイによって建設され、のちに大都に首都が移動したが、14世紀第1四半期には北方の軍事的拠点となり、1380年代に明軍によって壊滅されるまで存続した都城である。

- ① 1948年から49年にわたって、ロシア科学アカデミーが発掘調査を行い、広大な都城の一部について明らかにした。多くの遺物が発見された中に中国陶磁器があり、エルミタージュ博物館などに持ちだされていたが、現在は大部分が返還され、モンゴル国立歴史博物館とモンゴル国立考古学研究所に保管されている。私どもの研究チームは、予備調査を含めて3年にわたり、両所と共同研究協議書を結び、保管されている全ての陶磁器の破片を写真撮影し、大部分について実測をおこない、調書を作成した。
- ② 主な陶磁器は、中国・竜泉窯青瓷、磁州窯系鉄絵白釉陶器、景德鎮窯青花瓷・青白瓷、月白釉陶器、黒釉陶器などである。これらは中国江南地域（江西省・浙江省）を中心に、13世紀後半から14世紀前半に焼造されたものである。ロシア科学アカデミー調査分については、破片に記入されていた注記に基づいて、発見位置と出

土層位を再検討し、この遺跡・各遺構の性格と結びつけた。これによって、この地に搬入された時期が、従来の見解とは異なり、14世紀前半期に限定されていることを明らかにした。

- ③ ロシア科学アカデミーの報告書は、1966年にロシア語で刊行され、現在ではわが国内では簡単にみることができないので、この書に記載されている陶磁器で、モンゴルに返還されていないものを抽出、紹介し、現在の研究水準から再検討を行った。
- ④ この遺跡出土の陶磁器の中に、旧南宋地域では生産窯が同定できない白瓷があり、それを追求するために、中国東北部の踏査を行い、内モンゴル自治区赤峰市周辺にある白瓷窯の可能性を指摘した。
- ⑤ カラコルム遺跡の研究と平行して、モンゴル国立考古学研究所が保管しているシャーザンホト遺跡、タヒリンオス遺跡の陶磁器についても、はじめて詳細に調査し、実測図・写真を添付して公刊した。さらに、江上波夫が採集した内モンゴル・オロンスム遺跡出土品について、横浜ユーラシア文化館と東京大学東洋文化研究所に保管されており、これらについても同様な考古学的方法で調査し、報告した。

(2) 成果の国内外における位置・インパクト

- ① 調査によって明らかにできた成果を『カラコルム遺跡出土陶磁器の研究I』2007、総頁64、『カラコルム遺跡出土陶磁器の研究II』2009、総頁106、の2冊に英文サマリーを付して公刊し、内外の研究機関およびインナーモスト・アジア史研究者に配布した。さらに、2000年からこの遺跡の発掘調査を行っていた（現在は中断）ドイツ・ボン大学チームが報告している陶磁器についても収録・検討した。これらによって、モンゴル帝国の旧都であるカラコルム遺跡出土陶磁器の全貌がほぼ把握できた。この私どもが作成した2巻の報告書によって、わが国の中国陶磁器研究の水準を海外に知らしめることが出来たと確信している
- ② 出土陶磁器の全体像を把握するとともに、特定の製品を詳細に追跡することによってあいまいな交易史にしないことに注意を払ってきた。そこで景德鎮窯でつくられた元青花瓷に焦点をしばり、江西省の生産窯からカラコルムへの輸送ルートを追跡する目的で、景德鎮窯-長江-鎮江-南北運河-大都の間の地域出土の元青花瓷を調査し、このルートの実証性を明らかにした（亀井明德 2010「中国出土元青花瓷の研究」『亜州古陶磁研究IV』, pp. 36-74）。

そして大都からは草原地帯を貫くテルゲン・モリン・ナリン道を通してカラコルムに元青花瓷などが輸送されていたことを実証した。

- ③ カラコルム遺跡出土の陶磁器に穿孔されている破片が多数発見された。これはヒビ割れ拡大防止の目的とみられる。この補修は穿孔して鏝でとめる技法であり、広くおこなわれている。『集史』には大都とカラコルムとの間の上記の幹線道に絶えず馬車が荷物を運搬していると記されているが、少なくとも陶磁器に関しては、搬入時期が限定され、補修しながら大切に使用されていたと考えている。

(3) 今後の展望

①カラコルム遺跡の発掘調査は、ドイツ・ボン大学を中心としたドイツ隊が2000年ころから行ってきたが、2008年から一部の地域（推定寺院跡）を除いて調査を中断しており、再開の予定もないと仄聞している。この遺跡については、もともとわが国が（加藤晋平国学院大学・白石典之新潟大学一本科の研究分担者）、ユネスコの要請を受けて、遺跡保護の観点から実施しており、発掘優先ではなく、山羊・羊による草原の摂食被害から鉄条網で囲み、遺跡を守る処置を行ってきた。遺跡は、ロシア隊と合わせても、発掘した面積はごく一部分に過ぎず、未解明の部分が多い。したがって、わが国が、モンゴルの考古学界と協力して、調査体制を整備し、今後、本格的に取り組む必要がある。すでに現地にわが国の援助によって博物館建設が行われており、しかも、わが国学界にはモンゴル研究者は相当数があり、いずれもモンゴル研究者と良好な関係を維持している。モンゴルの人々にとって、この遺跡は古都であり、特別の感情を抱いており、学問的な成果とともに、両国の友好を促進する意味でも、近い将来、わが国の主導で発掘調査が実施できることが期待される。

- ②遺跡から陶磁器が万遍なく出土していることによって、陶磁貿易が行われていたというような、あいまいな結論は学問的に有効とは思われない。これを克服するために、特定の陶磁器に限定して、より細密な分析が必要である。その一つとして、本科研を通じて、景德鎮窯で生産された元青花瓷を組上にあげた。これを選択した理由は、数ある中国陶磁器のなかで、元青花瓷は生産量が少なく、高価であり、したがって発見件数も少なく、特異な製品なので、分析が容易である特徴を有している。現在までに、この陶磁器について、モンゴルをはじめとして、中国・古琉球（亀井明德 2008）・日本（亀井明德 2010）・フィリピン・インド

ネシアの出土状況を把握ないししつつある。

- ④ インナーモスト・アジア地域から出土する陶磁器を、少なくともアジア地域全体の中で位置付けることが必要である。これは簡単に結論が出るような課題ではない。それ故に、特定の陶磁器に限定すること、すなわち元青花瓷をとりあげて、各地域、各遺跡の詳細な調査が前提条件として求められている。
- ⑤ インドネシア・トローラン遺跡は、マジャパヒト王朝の首都であり、元青花瓷などの陶磁器が大量に出土することで知られているが、本格的な調査はなされておらず、少数の断片的な資料が公開されているに過ぎなかった。インナーモスト・アジアを理解するために、東南アジアを代表するこの遺跡出土陶磁器の調査を行いつつある。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計19件）

- ①亀井明德「元様式青花白瓷の研究」亜州古陶磁研究IV、査読有、2010、pp.1-35
- ②亀井明德「中国出土元青花瓷の研究」亜州古陶磁研究IV、査読有、2010、pp.36-74
- ③亀井明德「日本出土の元青花瓷の諸問題」亜州古陶磁研究IV、査読有、2010、pp.75-107
- ④柳澤明「清代モンゴル東部辺縁地域における「民族」の接触と変容——嫩江中流域の旧八旗地帯を中心として——」東北大学東北アジア研究センター、査読無、2009、pp.25-32
- ⑤柳澤明「遼寧省鳳城・岫巖のバルガ人」北東アジア研究別冊1、査読無、2008、pp.47-66
- ⑥亀井明德「遼金代土城出土の陶磁器の組成——農安遼塔出土絞胎盒」アジア遊学107号、査読無、2008、pp.80-87、
- ⑦亀井明德「古琉球出土の元青花瓷の研究」『九州と東アジアの考古学 下巻』査読無、九州大学考古学50周年記念論文集、2008、pp.581-596
- ⑧亀井明德「久米島における華南三彩陶の新資料」久米島自然文化センター紀要第8号、査読無、2008、pp.1-6、
- ⑨二宮修治他「ペルシア陶器を科学する——釉薬の化学分析」中近東文化センター附属博物館、査読無、2007、pp.28-32
- ⑩白石典之「和林興元閣新考」D. ツェヴェーンドルジ共著、資料学研究、4号、2007、pp.1-14
- ⑪白石典之「甘粛西部における魏晉十六国時代墓の編年」西北出土文献研究、5号、pp.5-26

〔学会発表〕(計4件)

①亀井明德「元代青花白瓷の出現をめぐる諸問題(元様式青花白瓷研究)」元代青花瓷研討会議, 台湾大学芸術史研究所, 2009年12月

②亀井明德「モンゴル出土元青花瓷をめぐる諸問題」シンポジウム・海のシルクロード, 専修大学, 2007年6月

〔図書〕(計9件)

①白石典之, 同成社『チンギス・カンの戒め—モンゴル草原と地球環境問題』2009, 総頁135

②KAMEI AKINORI Sainsbury Institute for the Study of Japanese Art “Okinawa: The Rise of an Island Kingdom, Archaeological and Cultural Perspectives”, 2009, pp. 63-69

③亀井明德 科研報告書『カラコルム遺跡出土陶瓷器の研究Ⅱ』2009, 総頁106

④岡内三眞 早稲田大学オンデマンド出版シリーズ『シルクロードの考古学』2008, 総頁130

⑤二宮修治, 朝倉書店『現代社会の考古学』「文化財科学と考古学」2007, pp. 85-126,

⑥亀井明德 科研報告書『カラコルム遺跡出土陶瓷器の研究Ⅰ』2007, 総頁64,

〔その他〕

亀井明德ホームページ

www.isc.senshu-u.ac.jp/~thb0390

6. 研究組織

(1) 研究代表者

亀井 明德 (KAMEI AKINORI)

専修大学・文学部・教授

研究者番号: 70204633

(2) 研究分担者

岡内 三眞 (OKAUTI MITSUZANE)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号: 90093210

二宮 修治 (NINOMIYA SHUJI)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号: 30107718

白石 典之 (SHIRAI SI NORIYUKI)

新潟大学・超域研究機構・教授

研究者番号: 40262422

柳澤 明 (YANAGISAWA AKIRA)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号: 50220182